

30 有余年の大学生活を振り返って

福井 七子

関西大学での時間は、学問を中心として私の生活に彩りを添えてくださった人々のおかげで、非常に恵まれた期間だった。30 有余年にわたって、まったく波風がたたなかった時期がなかったとは言えない。ルース・ベネディクトという複雑な女性を研究テーマの中心にしたことで、彼女の思想・文化の捉え方、また彼女の異文化理解に迫ろうともがき続けた年月であった。

研究の性質から、私は常に一次資料を求めようとした。資料集めがうまくいき、というより納得いくまでやり続けたというべきかもしれないが、そして多くの人々に助けられ、これまでもあまり研究がなされていなかった分野を少しは明らかにできたのではないかと考えている。

アメリカには6回ほど調査旅行をした。第一回目の調査旅行は実に不安な気持ちでいっぱいであった。プキプシーにあるベネディクト・コレクションを中心に、エール大学や議会図書館にも出かけた。ニューヨークの図書館では思いもかけなかった資料を得ることができた。結果的に私の心配は杞憂に終わったのだが、資料収集だけでは何も発信できない。収集以上に努力が求められるのは、それを読み解き、まるでジグゾーパズルのように時間軸を中心に埋め込んでいかねばならない。

ジェフリー・ゴラー研究のためイギリスに行くことにはためらいもあった。彼の存在があまりにも未知数であったためである。しかし、コレクションを見たいという気持ちには従わざるを得なかった。結果的に行ってよかったと考えている。これまで未発見の資料を手にすることができた。しかしそれをうまく読み解くことには難渋した。これも私が子どもの頃からお世話になっている電気店を営んでいる猪ノ山さんのおかげで判読できるようにしていただいた。「あの手この手」の方法と技術を駆使して、時間を惜しまず考えてもらったおかげで、資料を読み解き、一冊の本として世に出すことができた。

2009年頃より、翻訳を中心に研究を深めている。翻訳をするにあたって、英語のニュアンスも含め、著書の深遠な部分の理解が求められる。これは私の個人的な思いだが、バイリンガルな人とよぶことができるのは菊地敦子先生をおいて私は知らない。何年にもわたって菊地先生と行なっている翻訳・解釈のセッションは私の仕事に励みと力を与えてくれている。菊地先生との仕事はこれからも当分続くことになるが、これまた結構なことである。

振り返ってみれば、佳き人たちに恵まれた30 有余年であった。文学部時代からともにしていた平田渡先生にはひとかたならずお世話になっている。

良きこと、悪しきこと、後悔すること、また理不尽さを感じることも少なからずあった。しかし、人もそれぞれ、生き方もそれぞれ、価値観もそれぞれである。私個人の価値観では到底考えられないような人や出来事も経験したが、それもまたよしである。

30有余年、長いようで、短い間だった。私の仕事はまだ続く。志半ばで亡くなってしまったベネディクト研究者の気持も大事にしたい。よく両親から金食い虫と言われてきたが、まだ自分この生活が続く。それもまた「よし」とどこかから聞こえてきそうな気がする。